

一般の人のための初級会話クラス「日本語で話そう3」1課

(2003年11月11日実施)

「きょうは丁寧に話しましょう。」緊張ぎみの学習者の顔を前に、授業が始まった。

11月11日午後2時。公開講座のはじまりである。学習者の国籍は、タイ、インド、フィリピン、オーストラリア各1名、中国が5名の計9名だ。このうち、タイ、インド、フィリピンの3名はすでに3期目を迎え、前の学期にはTIJで開発中の「日本語初級」で、一度きょうの学習項目にも接したことがある。

きょうの学習項目は、「敬語」。中心となるのは、「お V.になります」の形で、色々な動詞を使い、「お V.になりますか。」「どうぞお V.になってください。」「または、「どうぞお V.ください。」とバリエーションをつけて、訪問の場面で敬語を使って訪問客を迎え、もてなす、というもの。授業の最後に行う目標としては、せっかくの機会なので見学にいらっしやっただけの初対面の日本人の方と、あいさつ、自己紹介をし、敬語を使って話をする、という活動を設定した。ただ、練習の仕上げとしては、テキストの会話の場面に近い、訪問の場でのロールプレイも行うことにした。

まずは、既習の敬語の復習から。「この週末、どこかへいらっしやいましたか。」との教師の問いに、学習者からは「～へまいりました。」という謙譲語もきちんと返って来る。でもまだまだ表情が硬い。タイのNさんは「ディズニースランドへまいりました。」とのこと。ここで追加質問を促してみる。このクラスの人たちはとてもコミュニケーションが上手でいつも限られた語彙、文型の中で実に生き生きと血の通ったやりとりをつくりだしてくれる。「誰といらっしやったんですか。」とすかさずLさんが聞き、「もっと丁寧に。」という教師の指示で、すぐ「どなたといらっしやったんですか。」と訂正。「娘と、友達と参りました。」とNさんが答える。ふうん...という顔の学習者たち。今までの緊張から、会話の内容に注意が移った様子だ。もっと聞きたいことがありそうだ。Nさんは既婚。2歳の娘さんがいる。「え、ご主人は？」と教師が促すと、学習者の方から「ご主人はいらっしやいましたか。」と出てくる。この場の気持ちによりぴったり来るように、「ご主人はいらっしやらなかったんですか。」と教師が示してみた。否定疑問文はちょっと難しいかな、でも、「え、どうして...」の気持ちにはこれがぴったり来る。教室内のやりとりの中でもその時、その時、心が動いているから、学習者達はこの表現に含まれる「気持ち」を理解してくれたようだ。

しかし、これは授業のほんの前置きの部分に過ぎない。ここから、「～なさいます」「おっしやいます」「ごらんになります」「めしあがります」...と敬語の特殊形が続く。このクラスの学習者のすばらしいところは、生き生きとやりとりをしながら、決して完全には内容に流されてしまわない点だ。これは「いらっしやいます」だった、「食べる」は、「めしあがる」なんだ、ということのを頭に留めてその話題を楽しみ、次へ。「お V.になります」のような規則性は勉強するのも気持ちがよいようだが、「なさる」「おっしゃる」

「ごらんになる」「めしあがる」と続くと、元気な学習者たちもさすがに苦しそうになってきた。その分、話題で引きたてようと、映画のパンフレットを示すと、「もうマトリックスをごらんになりましたか。」「いいえ。まだです。」「ぜひごらんになってください。おもしろいですよ。」と、学習者の側で会話が展開していく。教師の役割は会話のきっかけを作る事、途中で会話がおかしな方向へ行かないように、方向修正をすること、適切な形を与えること、に尽きるようだ。

次々と紹介される敬語のかたちと、オーストラリアのFさんは奮闘していた。彼は理解したことはきちんと自分の頭で再構築して自分の口から出して確認したい。教師の訂正をふんふんと聞いて次へ行こうとするタイプの人たちがいる中で、彼はしばしば、「ちょっと待って!」とクラスメートたちを制し、自分が完全に言い直せるまで次へは進ませまいとする。これは決して「困ったこと」ではなく、クラスの人たちは皆、これをよく理解し、「がんばって。」と言いながら待ってあげる。実はこれが彼自身のみならず、待ってあげている人たちの耳にも今の表現の再確認となる実に貴重な時なのである。教師の側もこれを歓迎している。学習者が時としてお互いのプライベートなことまでクラスで話題にし合い、心を通わせる一方、ここで学ぼうとしていることを常に確認しようとする。この二つの力の存在がこのクラス全体の雰囲気を実に明るく楽しく、かつまじめなものにしていると思う。

敬語のかたちの紹介と練習で、学習者の頭も心もフル回転してきたところで、訪問の場面に入る。クラスを大きく二つに分け、左半分の人たちが右半分の人たちの家を訪問する、というやや強引な設定にした。いきなり玄関のベルをピンポン...と教師は考えていたのだが、左半分のグループのLさんとPさんからごく自然に、

L : Pさん、こんど~さんのお宅へいくんですが、何か持っていらっしゃいますか。

P : 私はお菓子を持っていこうと思っています。Lさんは。

L : じゃあ、私はお花を買っていきます。何時にどこで会いましょうか。

P : そうですね。~時に~で会いましょうか。

L : わかりました。

...と次々に既に教科書で学習した待ち合わせの場面の会話が出てきた。これには教師もびっくりするやら感心するやら。こういう風にテキストの会話が個々の学習者の頭の中の引き出しにしまわれ、必要な時にひとつながりになって取り出せるというのは会話学習のめざすところではないか、と思う。

訪問のロールプレイでは「スリッパをはく」「(コートを)かける」「(ハンガーを)使う」など、この場面特有の語彙を追加した。テキストにはないが、どれもこの場面ではよく使われ、接しているはずの語彙なので学習者の側から知っているものを出し合う手間をかけた。教師の側から最初に与えるほうが手っ取り早いですが、より学生の頭が動くように、と考えた。

時間もオーバーしていたが、ロールプレイのあと、見学の方たちと一対一で話をする時間を設けた。実は、学習者たちの中には以前、はじめて敬語を学ぼうとした時、「敬語は私達にあまり必要ではないと思う。」と漏らしていた人たちがいた。確かに、上下関係の存在する組織に属さない主婦にとって、舅、姑に向かってあまり敬語を使いすぎるとかえってよそよそしく聞こえ、もう敬語は使わなくていい、といわれたりするらしい。そういう人たちにとっては敬語が使われる最も妥当な状況は、初対面の人との会話であろう。その意味で今回の公開授業はまたとないチャンスだったわけである。「どちらに住んでいらっしゃいますか」「どんなお仕事をなさっていらっしゃいますか。」「よくこちらへいらっしゃいますか」等々、お互いに色々なことを聞きあってこの公開授業は終了となった。このクラスのコミュニケーションに対するエネルギーと学ぶ意欲が見学の方たちにも実感して頂けたら、何よりであったと思っている。

翌々日、通常の授業で教室に入ると、学習者たちは目を輝かせ、「先生、私達、どうでしたか。」と聞く。「とてもいいクラスで、いい生徒さんたちですね、と皆さんがおっしゃいましたよ。」と伝えると、実に満足そうな表情で、「先生、お疲れ様でした。先生がいちばん緊張したでしょう」と言う。私の手が震えているのが見えたのだそうだ。一般の日本語クラスというのは、大人の学習者たちの協力によって、学習者同志も、教師も支えられているのだということを改めて感じる事ができた。

(渡部尚子)